ニッポン ドクター和の 臨終図巻

㉘⓪ 医師 石蔵文信

充実の「オマケの人生」、穏やかな旅立ち

60歳まで生きられたら 本当にラッキー

大阪・十三の商店街のはずれにあるこの人のクリニックを僕が訪ねたのは2021年5月の冷たい雨の日でした。がんの話、コロナの話、死の話…3時間たっぷりと意見を交わしました。

この対談をいずれ本にするつもりでいましたが、コロナ禍で出版のタイミングを見失っており、そこに舞い込んできた訃報。戸惑いの中で原稿を書きます。

女性の更年期障害の主因は夫にあるのでは？ という観点から「夫源病（ふげんびょう）」という言葉を流行させたことでも知られる、心療内科医で循環器内科医でもあった石蔵文信医師が11月3日に、大阪市内の自宅で亡くなりました。享年66。

長尾和宏（ながお・かずひろ） 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

石蔵さんは2年前に前立腺がんが見つかりその後、全身に転移していることが判明。手術不可能な状態であり、ホルモン治療などを続けていました。

大阪に緊急事態宣言が出されていた昨年5月、なぜ石蔵さんに会ったのかといえば、彼が〈譲（ゆずる）カード〉なるものを発案したからです。あの頃、ヨーロッパ各地では呼吸器などの医療機器が不足し、若いコロナ患者が優先されて高齢患者の治療が打ち切られる事態が起きていました。

誰の命を助け、誰の命を諦めるのか？ 現場の医師がそれを決めるのは、あまりにも酷なことだと報道されていました。

日本でも今後同じ事態が起きるに違いないと想像した石蔵さんは「もしも医療が逼迫（ひっぱく）したときに私がコロナになったら、若い人に治療を譲ります」という意思を示したカードを作成したのです。〈譲るカード〉は、誰からも強制されるものではありません。あくまで自分の意思で携帯するもの。しかし、この〈譲るカード〉のことがメディアで紹介されると、石蔵さんのもとには「高齢者は死ねというのか！」という怒りのクレームが多く寄せられたといいます。

石蔵さんは、僕にこんなことを話してくれました。

〈今回のコロナを機に私が言いたいのは、「生き方」も大事だけど、「死に方」ももうちょっと考えてよ、ということ。死ぬことについてのディスカッションを健康な時からしなければいけないんです。人間は本来、60歳まで生きられたら本当にラッキー。それ以降はオマケの人生です。

今（対談当時）私は65歳なので5年のオマケをもらったと考えています。もうすぐ死ぬ、とわかったほうが、やりたいことの優先順位がついて毎日が充実してくるんですよ…〉

そう言って、少年のような笑顔を見せてくれました。最期はご家族に見守られ、とても穏やかな旅立ちだったそうです。